

第8回エクセレントNPO大賞 「市民賞」講評

1. 審査の視点

この市民賞は、NPOの「市民性」を問うものですが、広く市民に支えられ、市民の参加を受け入れ、そのことを通して市民の意識をどう高めているか、という視点でその組織のありようを捉えています。具体的には、ボランティア受け入れの4項目と寄付受け入れの1項目に関する自己評価と第三者評価をもとに判断しています。ですから、市民参加の在り方を問う、いわば市民参加賞といえるかもしれません。

でもそれだけではNPOの「市民性」の全体を把握することはできません。取組を始めたときの思いやその後の活動の姿勢を、あるいは一市民としての拘りを、提出された「組織のストーリー」やWebサイトの公開情報から読み取り、そこにどのように「市民性」が反映されているかも確認します。その上で、審査会で課題解決力や組織力の評価も踏まえて「市民賞」を決定しました。

本来なら活動現場を視察し、リーダーをはじめとする関係者に直接インタビューして確認することも必要ですが、それはこのエクセレントNPO大賞については行っていません。Web情報も含めて「言葉で表現されたもの」が勝負であったという点もご了承ください。

2. 審査結果

(1) ノミネート団体

市民賞には、活動地域も歴史も財政規模も多様な下記5団体がノミネートされました(50音順)。活動地域で見ると、海外1団体、国内全域2団体、地域2団体で、それぞれの特徴が見られます。設立年後の歴史では6年から30年以上までと大きな差があり、財政規模では184万から1億円以上までと更に大きな差があります。

①「ウォーターエイドジャパン」

英国で1981年に設立された「水と衛生」を専門とするNGOの日本組織で、設立は2013年。「全ての人々が、全ての場所で、清潔な水と衛生を当たり前利用できる世界」の実現を目指す。そのため現地パートナーや地元の専門家、コミュニティの人たちとともに地域にあった解決法を導入する。中心となるボランティアは「ウォーターエイド・スピ

一カークラブ」、クラブのメンバーは講習により認定を受け、学校の出前授業用教材を作成し、実際に授業をする。他にも「翻訳ボランティア」「イベントボランティア」「事務局ボランティア」があり、事前学習を重視。継続寄付者には申込時に活動資料や寄付の注意事項をまとめた「Welcome パック」を送付、受領後はメルマガ・リストに登録、年3回の会報誌、年次報告書等を送る。

②「二枚目の名刺」

組織や立場を超えてこれからの社会を創ることに取り組む人がもつのが「2枚目の名刺」。それを持つきっかけをつくるために2009年に設立。社会人とNPOの出会いの場「Common Room」や社会人が期間限定でNPOの事業に取り組む「サポートプロジェクト（SPJ）」を通じ、2枚目の名刺をもつ機会を提供。複数の組織に所属して活動することの制度的な制約を改善すべく、行政や業界団体とも取り組む。ボランティアには、SPJに3ヶ月間参加する「SPJメンバー」と個々のSPJの設計・運営に取り組む「SPJデザイナー」、それに団体運営に取り組む「組織運営メンバー」の3種がある。運営費用は助成金の他、関連企業からの資金を委託費として確保しているが、寄付を含めたファンディング体制の見直しにも着手した。

③「POSSE」

若者を対象に、労働相談、生活相談、奨学金相談、労働法教育を電話やメールや面談によって行う。2006年設立の市民的専門性の強い活動。その社会実態を「ブラック奨学金」「ブラック企業」「ブラックバイト」などの言葉で発信、メッセージ性をもって解決に向けて取り組んでいる。最近では特に外国人労働者や留学生の問題に取り組む。ボランティア希望者には必ず面談を行い、団体の取り組みについて説明し、相談事業に参加する意向を確認の上、労働法の基礎知識や対応時の注意点について隔週の学習会を行う。相談対応後は振り返りを行い、意見を出すことも多い。寄付者には必ずお礼メールと年3回発行の雑誌を送る。ボランティアも寄付も、参加の主体性が強いところが特徴。仙台と京都に支部がある。

④「ユースコミュニティ」

発足の起点は、地元有志が大田区（東京都）の図書館を利用して期間限定で始めた「夏休み宿題お助け塾」。2013年に大田区の助成事業に採択され、生活保護受給家庭の小中学生を対象に学習支援教室を開校、本格的に「子どもの貧困対策」に取り組む。2016年度より区から「子どもの学習支援」を受託、現在は自主・受託を含め10拠点を運営。中学生を中心に270人が在籍、150名のボランティアが学習を支え、「努力することの大切さ」を伝えている。ボランティアが主体性をもって活動できる環境を重視、ボラン

ティアには適正と意向に合わせて活動と役割を担当してもらい、授業後には必ず振り返りのミーティングを行う。これまでは寄付に頼っていなかったが、コロナ禍の中で新たな取組を始めたところ。

⑤「和白干潟を守る会」

博多湾に面した和白干潟を埋立から守ろうと、地元市民が1987年に中止を福岡市に請願、埋立は中止になり人工島計画に変更したが課題は残る。「市民の手で和白干潟を守っていこう」と翌88年に「守る会」を設立、以後「自然観察会」「清掃活動」「調査活動」「広報活動」「和白干潟まつり」「他団体と連携した保全活動」を続けてきた。活動には、地元の保育園、小中高校、大学、企業、生協、野鳥の会などが参加あるいは共催する。広報紙「和白干潟通信」を年4回発行、地域の人々の自然保護への意識を高める。ボランティア募集は広報紙やホームページで具体的な活動内容を周知、参加することで干潟保全の大切さを感じてもらおう。寄付者には受領の礼状を送り、広報紙で寄付の使途や成果について報告する。

(2) 市民賞

審査会での慎重な協議の結果、上記5団体の中から特定非営利活動法人 POSSE が市民賞に決まりました。市民賞5項目の評価においても、課題解決力賞と組織力賞の項目を合わせた総合評価においても、僅差ではありますが最上位でした。16年前に設立された全国を対象に活動するNPO法人で、財政規模は約1300万円、スタッフ自身が殆ど無償のボランティアです。鋭い人権感覚と高い市民的専門性により、日本社会の根深い問題で苦しむ人たちに寄り添い、その根本的な解決に向けて取り組んでいます。政府からも企業からも独立した市民セクターの立場から、多くの市民に支えられて運動性を伴う活動を展開しており、今後のNPOのありかたを示す一つの事例と言えるでしょう。

3. 今後に向けての期待

今回ノミネートされた5団体は、前記のように活動地域も設立後の歴史も財政規模も、実に多様です。同じ市民参加のあり方といっても様々な特徴をもっており、同列に比較するのはとても難しいということでした。今回は残念ながらノミネートに終わった団体も、今後はさらに自分たち独自の特徴を生かしつつ、市民性を強めるとともに課題解決力と組織力を強めて、育ってほしいと願っています。

なお、これまで市民賞の審査を担当してきて最近感じるがあります。市民賞にも他の2つの賞にはある「力」を付したらいいのではないかということです。

市民賞を市民参加賞と位置づければ今のままでいいのですが、最近の市民賞授賞団体を見ますと市民参加を超えた市民性の強さを感じます。特に昨年度の市民賞のジャパン

ハートがそうでしたし、今回の市民賞の POSSE もそうです。その市民性の強さが課題解決力や組織力を養い、強めているという実感をもつようになりました。市民参加を含むさまざまな市民的マインドが NPO の大きな力になっていること、そんな基準も加えた「市民力賞」に展開するのもいいのではないかと思っています。

NPO にとって「市民性」とは何か、それはあらゆる NPO が常に問い続け、硬直化させることなく多角的な議論を重ねててかなければいけないことでしょう。それはきっと楽しいことでもあると思います。